

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 11 日現在

機関番号：32408

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520552

研究課題名(和文) 多言語社会における国際共通言語としての英語コミュニケーション標準の構築

研究課題名(英文) A Study of Expected Standards of English as a Lingua Franca for Multilingual Communities

研究代表者

生田 祐子 (Ikuta, Yuko)

文教大学・国際学部・教授

研究者番号：50275848

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：非英語母語話者の中で英語(ELF=English as Lingua Franca)を使用する際、円滑に意思伝達するための対話能力に求められる共通要因について検証した。国際機関に従事する職員を対象に調査したところ、IC(=Inner Circle)を標準とする傾向は英語のライティングにおいては顕著であるが、スピーキングではほとんど見られない。母語の影響による発音は意思疎通の阻害要因とはならず、話してのintelligibility(明瞭さ)とlogic(論理性)が重要であり、repetition(繰り返し)やclarification(明確化)などの方法で意思疎通の問題を解決している。

研究成果の概要(英文)：This study has investigated the expected standard of ELF (=English as a lingua franca) among non-native speakers of English. A survey was conducted among proficient Japanese ELF speakers who work for international organizations. The result shows that the tendency of IC (= Inner Circle) as a standard is prominent in their English writing, but hardly recognized in their speaking. In particular, "pronunciation with L1 identity", is not considered as critical hindrance for communication at all, but intelligibility (clarity) and logic (logicality) of speaking are important factors not to impede their communication. They are likely to solve problems in communication by asking for repetition or clarification of utterances.

研究分野：英語学

キーワード：共通語としての英語 リンガフランカとしての英語 英語コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

世界の多くの国や地域は、複数の言語話者が共存する多言語(multilingual)社会であり(Starkey, 2000)、欧州連合(EU)に見られるように 21 世紀のグローバル社会では、言語と文化の多様性と共存が重要な課題のひとつである。加速度的に企業や教育機関のグローバル化が進む今日、世界という共同体の多言語社会では「意思疎通のツールとしての言語」が必要と考えられ、事実上、英語が共通言語として多様な役割を担い拡大を続けていると考えられる(生田, 2011)。一方では、欧州評議会(Council of Europe)やユネスコを中心に、個人の言語の権利や少数話者言語の権利が推進され、異なる言語話者が共存する地域では複数の言語を使用する政策を掲げ、多言語主義がグローバル社会の共通理念とされている。欧州評議会は、多言語主義政策を実践するために複言語主義(Plurilingualism)を提案し、欧州連合を中心とする国において、母語言語以外に少なくとも 2 言語に精通する、複数言語を習得する教育政策を遂行している。その結果、Jessner(2006)等の研究者によると、複言語主義政策を実行することにより、多様な言語の選択肢があるにもかかわらず英語の選択に拍車がかかっていると考えられる。Fishman(2006)は、英語の拡大が影響して他の言語や地域の文化が消滅していく事例はなく、言語使用の衰退はむしろ経済的な側面によるものだと主張している。また英語使用により相互理解が促進され、異なる言語話者に対する関心が高まり、結果的に相手の言語を学び使用する人が増えているとも言及している。Canagarajah(1999)は英語を自らの追加言語(own additional language)と認識する人口が増加すれば、英語帝国主義(English Imperialism)(Phillipson, 1999)的な見解とは相反することになると予測していたが、今日ではまさに英語の所有権が、母語話者より格段に話者数の多い非英語母語話者へと

広がったと考えられている。

2. 研究の目的

国連等の国際機関は、世界中の様々な言語話者が協働する多言語社会であり、複数の公用語と作業言語が採用されている。しかし、業務上のコミュニケーションは、事実上、英語が共通言語(ELF=English as a Lingua Franca)として使われ、非英語母語話者間においてもその傾向は顕著である(Ikuta & Takahashi, 2010)。本研究では、国際協力の現場に従事する非英語母語話者の専門家たちが使用する共通言語としての英語(ELF)に関して、円滑な国際理解および異文化理解を促進するための英語コミュニケーションを構成する質的要因を検証する。

3. 研究の方法

国際機関等の多言語社会において、円滑に意思伝達するために、英語(ELF)コミュニケーションの対話能力に求められる課題は何か。その要因となる標準概念を検討するために、国内外の文献調査を経て、3つのフィールド調査を実施した。

(1) 日本人の国際機関職員を対象に半構造的インタビュー調査を行った。調査対象者は、国連関連機関で日常的に英語を使って仕事をしている男女各 3 人計 6 人で、調査手法には半構造的インタビュー(semi-structured interview)を用いた。事前に準備した、過去に経験した英語使用時の困難や英語の規範に関する 6 つの質問を基に、日本語でそれぞれ 1 時間のインタビューを実施した。インタビュー内容は参加者の許可を受けた上で録音し、部分的に文字起こしを行った。

(2) 日本人大学生(文教大学)12名とロシア人大学生(プリヤート大学)7名とのスカイプシステムを用いて遠隔交流授業を実施、ELFを使用する状況下において、円滑に意思伝達するための対話能力に求められる共通

の要因を観察した。

(3) 以上の調査から得られた要因に関して、200名の日本人英語話者を対象に、英語使用時の意識に関するアンケートをオンラインで実施した。対象者は、英語を使用する仕事に従事する日本語を母語し、英語を仕事で使用する社会人で、その中には中学または高校で英語を教える教員50名を含む。

4. 研究成果

Jenkins(2013)は、共通言語としての英語(ELF=English as a Lingua Franca)を「第一言語が異なる人々の間で接触言語として使われる英語(英語母語話者を含む)(拙訳)」と定義している。ELFコミュニケーションにおいてはintelligibility(明瞭さ)が究極的な目的であると考え、外国語としての英語(EFL=English as a Foreign Language)コミュニケーションにおいては、英語母語話者の言語文化の規範を真似るが、ELFコミュニケーションにおいては、言語文化の規範は即興で且つ交渉され、accommodation(調整)の過程が不可欠とされている(Seidlhofer, 2011)。尚、Smith(1992)によると、intelligibilityとは、語と発話の認知を指し、comprehensibilityは、語と発話の意味を理解できることを指している。

ELF話者は、誤解を巧みに回避する傾向があり、ELFの会話は、実際のところ、上手く成立している(Mauranen, 2006; Kaur, 2010)。Meierkord(2000, p. 11)は、ELFコミュニケーションを、誤解よりも協調によって特徴づけられる異文化コミュニケーションの形と表現している。Graddol(2006)、Grundy(2006)、Jenkins(2013)は、円滑なELFコミュニケーションを可能にするためには、異文化コミュニケーションで必要とされる実用的な意思疎通の方策が重要であるとしている。一方、Jenkins(2009)がすでに指摘しているように、Expanding-Circle(=EC:外国語話者圏)の英語

は、未だ模範、すなわち特定のInner Circle(=IC:英語母語話者圏)の英語に依存する傾向がある。これは、国際共通言語としての英語コミュニケーション標準の構築を調査する上で、一つの課題と考えられる。

これまでELFの研究は、主にライティングよりもスピーキングのデータの分析を基に研究が進められてきた。現在、学術分野における最大のELFコーパスは、the Corpus of English as a Lingua Franca in Academic settings(ELFA)で、約100万語の口語データが収められている

(www.helsinki.fi/englanti/elfa/elfacorporus.html)。現在、ライティングのデータ(written academic ELF=WrELFA)の蓄積が始まっており、これが初のELFライティングのデータベースである(Mauranen, 2015, p. 39)。書き言葉は話し言葉よりも修正を受ける(Hynninen 2016)が、correctness(正確さ)よりもcomprehensibility(理解できること)の重要性が認識されつつある(Mauranen, 2016)。

生田と高橋(2014)は、上記の文献研究を基に、非英語母語話者の間で、ELFを使用する際、円滑に意思伝達するための対話能力に求められる標準概念を3つの調査結果に基づき考察した。

(1) 日本人の国際機関職員を対象にインタビュー調査を行った結果、IC(=Inner Circle)を基準とする傾向は英語のライティングにおいては顕著であるが、英語のスピーキングではほとんど見られなかった。その際、口語コミュニケーションにおいて、母語の影響による発音は意思疎通の主要な阻害要因とはならず、話し手のintelligibility(明瞭さ)やlogic(論理性)が円滑なコミュニケーションの要因であると考えられる。意思疎通に問題が生じた際には、繰り返し(repetition)や明確化(clarification)をはじめとする実践的な方法で問題を解決していることも判明した。ライティングにおいては、異なる文化背景によつ

て生じる書き方と解釈の仕方の違いが報告される一方、正式文書作成時は IC 規範を重視する傾向が見られた。

(2) 日本人学生とロシア人学生の遠隔交流授業を実施した際に、双方のコミュニケーション上の阻害要因を観察したところ、母語の影響による発音は問題ではなく、(1)の調査結果と同様、intelligibility が重要な要素であると分かった。スクリーンを通して、相手の音声に頼るコミュニケーションをとる状況下のため、intelligibility には声量の大小と抑揚の高低が影響していると思われる。

(3) 英語を使用する仕事に従事する日本人英語話者を対象とするアンケート調査の結果、IC(=Inner Circle)を英語使用の基準としている割合は、海外事業に携わる会社員より英語教員の割合がより高く、会社員の方が英語の多様性を受容する意識が高いことが判明した。望ましいリスニング力については、世界の多様な英語話者の発音が聞き取れる必要があると考え、自ら発する英語に関しては、文法への正確さや母語話者に近い発音であることよりは、声の大きさや Intelligibility が大事な要素であると考えていることが分かった。今後、comprehensibility (理解できること) や listen-ability (聴く力や態度) を重視する発信力の育成が英語教育への課題と考えられる。

以上の研究成果は、2017 年度に関連の国際ジャーナルに論文投稿を予定している。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

Takahashi (2017). Attitudes of Japanese learners and teachers of English towards non-standard English in coursebooks. *Changing English*, 24(1), 42–52. 査読有

Takahashi (2014). An analysis of ELF-oriented features in ELT coursebooks, 『English Today』第 30 巻・1 号、Cambridge University Press.

査読有 doi:10.1017/S0266078413000539、28～34 頁

[学会発表] (計 7 件)

Ikuta(2016) SLA in an Ever-globalizing World: Toward and Beyond and Idealized Native Speaker PacSLRF2016(Pacific Second Language Research Forum) コロキアム@中央大学

Ikuta&Takahashi(2014), A Study of Expected Standards of ELF Communication for International Communities, International Association of Applied Linguistics(AILA) World Congress 2014, Brisbane, Australia

生田(2014)「リンガフランカとしての英語と異文化接触：コソボ共和国と日本の大学生グループの事例研究より」第24回日本国際理解教育学会（抄録44頁- 45頁）

Ikuta(2013)Enhancing Intercultural Awareness using English as a Lingua Franca: Linking Students in Kosovo and Japan, International Association of World Englishes(IAWE), Arizona State University, USA.

Takahashi(2012) An Analysis of ELF-oriented Features in English Language Teaching Course-books, AAAL 2012 Conference, American Association for Applied Linguistics.

Ikuta(2012) Implications of Multilingualism and Learning English as a Lingua Franca in a Multi-ethnic Context: A Case from Kosovo, the Fifth International Conference of English as a Lingua Franca, Bogazici University, Istanbul, Turkey.

Takahashi(2012) English as a Lingua Franca in a Japanese Context: An Analysis of ELF-oriented Features in Teaching Materials and the Attitudes of Japanese Teachers and Learners of English to ELF-oriented Materials, the Fifth International

Conference of English as a Lingua
Franca, Bogazici University, Istanbul, Turkey.

〔図書〕(計2件)

Ikuta(2017). Linking People in Multilingual Contexts: Possibilities and Limitations of English as a Lingua Franca. In 文教大学国際学部叢書委員会(Ed.), 「国際学部叢書-世界と未来への架け橋-」第9章 285-330 頁

Takahashi, R. (2016). The attitudes of learners and teachers towards ELF-oriented materials, with related implications. In N. Tsantila, J. Mandalios & M. Ilkos (Eds.), ELF: Pedagogical and interdisciplinary perspectives (pp. 33-40). Athens: Deree – The American College of Greece.

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

生田 祐子 (Ikuta, Yuko)
文教大学・国際学部・教授
研究者番号：50275848

(2) 研究分担者

高橋礼子 (Takahashi, Reiko)
学習院女子大学・国際文化交流学部・講師
研究者番号：30613913